

発刊の辞

1999 年は 20 世紀における 1900 年代最後の年です。この年に日本語用論学会の機関誌『語用論研究』の創刊号を発行することになりました。

20 世紀を政治的に見れば、共産主義が台頭して資本主義と対峙し、最後に崩壊の過程をたどっています。この間 2 度にわたる世界大戦により悲惨な殺戮が繰り返されました。

一方、科学は飛躍的な発展をとげ、航空機はプロペラからジェットと進歩し、さらにロケットの開発により月への到達を果たし、各種の人工衛星が地球の周辺を回転しています。

言語研究の分野では、20 世紀に入り、ソシュールにより現代言語学の出発点が築かれ、プラグ学派の音韻論に次いで、構造主義言語学の道筋が開拓されてきました。第 2 次大戦後になると、チョムスキーが生成変形文法を主張し、学界をリードしましたが、すでに衰退へと傾いています。いまや、機能文法や認知文法など諸種の言語理論が提唱されています。語用論も意味論から分派しましたが、独立して言語学の一部門としての理論的体系を整え、現在、隆盛発展の途上にあります。

日本においても、昨年 12 月 5 日に同学の研究者が結集し、日本語用論学会を設立しました。語用論は、発話をその環境において考察する基本的姿勢に基づいて、直示、推意、前提、発話行為、会話規則、談話分析など生きた言語活動を研究対象としています。意味論、統語論はもちろん、認知言語学、心理言語学、社会言語学、言語獲得の分野とも深く関わっていて、文学や文芸文化の領域へも適用できる資質を備えています。

ここに『語用論研究』が研究成果発表の場として活用されるとともに、研究者同志の交流協力のセンターとして機能し、語用論の拡大と深化への中心的役割を果たすものと信じています。そして、若き研究者の手に引き継がれ、時間の枠を越えて 21 世紀へと突入し、言語を解明する作業を限りなく推し進めてくれることを心から期待しています。

1999 年 10 月 20 日

日本語用論学会会長 小泉 保